ています。ミュラーの信仰の祈りの秘訣をこの事からも教えられます。

私もミュラーの信仰に感化を受けて、祈ってもなかなか明るい見通しが立たない時などには、「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」等のみことばを握って祈ったり、その状況に適ったみことばの約束を握りしめるように心がけるようになりました。

▽待ち望んで祈る大切さを教えられる本

本書には、ミュラーが忍耐強く祈り続けた末に祈りの応えを得た記録が数多く記されています。

例えば、ミュラーは魂の救いのために祈ることは神のみこころに適っているのだから、必ず聞かれるという信仰に立ち、決して失望落胆せずに、救いに至るまで神を待ち望み、数十年も祈り続けたケースもあると告白しています。

この本を通して、すぐに祈りが応えられないとあきらめてしまいやすい私にとって、神を待ち望んで、継続して祈り続ける大切さをこの本から学びました。

▽御名の栄光のために祈る大切さを教えられる本

ミュラーが徹底してこだわっていたこと、それは「祈りが応えられることを通して神の御名の栄光が現わされること」であったことが本書に記されています。

彼が祈りの日記を書き残した目的はここにありました。彼の日記には、「〇〇年〇〇月〇〇日、これらの祈りをささげたことをここに書き留めておく。それは、祈りが聞かれた時に、このことを通して神の栄光が現れるためである。」と記してあります。

私も祈るときに「動機は何なのか」を心に問い詰めると、自分のメンツの為であることに気づき、愕然とすることがあります。ミュラーの徹底したスピリットを模範として、神の栄光の為に祈る者でありたいと本書を通して探られました。

ジョージ・ミュラー関連の本は3冊持っていますが、ガッツリ読むにはこの本がお勧めです。

歌ってみた

——教会福音讃美歌、ぜ～んぶ歌ってみました。

岡山教会牧師
渡邉そのえ

「教会福音讃美歌、ぜ～んぶ歌ってみました。」と言っても、毎回の祈祷会で3曲ずつ歌ったので（しかもクリスマスの讃美歌はアドベントに歌うなどの制約もありましたので）全506曲を制覇した頃には四年余りが経っておりました……。

——で、どうでしたか？

それがとても良かったのですよ。とっても楽しかったのです。（あくまで個人の感想です）

——どんなやり方で歌ったのですか？

先ほど少し触れましたが、祈祷会のプログラムに組み入れてみました。讃美歌集を3つに分けて3カ所からスタートすれば違うテーマの曲が歌えます。

もちろんそう簡単にやれるとは思いませんでした。何よりも奏楽者の技量に問題あり。奏楽者（私）としてはやらないで済むなら避けたいところです。見れば易々とは弾けるものばかりではなく、自分への限界も見えてきます。実際「何でこんなことをやろうと言ってしまったのだろう」と後悔の波が何回か襲ってきました。

さらには曲を忠実に弾くことの大変さ。「この曲は知っている」と思ったら微妙にインマヌエル讃美歌とはメロディーや左手伴奏が違っていて慌てて失敗することもありましたから尚更に楽譜を丁寧に確認することが必要でしたし、反対に全く知らない曲はテンポ・旋律・リズムを一つずつ取るところから始まりますから、今風のノリの良い曲には50を過ぎたおばさん奏楽者にとってはかなりのチャレンジでした。それでも左手が正確に弾けない時は右手のメロディーだけでもオッケーとハードルを下げてもらっ

たり、納得できない時はもう一週同じ曲を歌わせてもらったり……、「まずは歌ってみよう！」と言う気持ちで挑戦する。まさに「やってみた！」的な軽い気持ちで始めただけに、まさか四年もかかるとは思いませんでした。

ところで今まで『インマヌエル賛美歌』だけで事足りる、いえ事足らしてきた者としては『教会福音讃美歌』の発刊はセンセーショナルなものでした。「もしかしてこの教会福音讃美歌へ全面的移行となるのか！」と焦りも感じました。「まだインマヌエル賛美歌が使える間は触らなくても良いのではないか」とか「新しい讃美歌を覚えるのは時間がかかる。礼拝前や礼拝後の時間を使うと礼拝への心備えが短くなったり、帰る時間が遅くなるから無理ではないのか？」などの思いもありました。しかし結果として全曲歌うことにしたのは、教会の皆さんからの「それで、今度の讃美歌はどんな讃美歌なのですか？」というシンプルな質問に「答えられない！」という現実的なものでした。

今だったら私はこう言うでしょう。「教会福音讃美歌は良いですよ。メロディーがとてもきれいです。新しい曲から古い曲まで幅広く入っています。その讃美歌の作られた時代を感じます。歴史を感じます……。」

さて最後に、お勧めの曲を何曲かお話しさせてください。今回は「節期」的なものです。

まずは「神の作られた世界・年始と年末」の５０３番～５０６番を。この４曲は順に17世紀、18世紀、19世紀、20世紀に生きていた人（生きている人）によって作られ、歌詞を読むだけでもそれぞれの時代の違いがあるものの一年を振り返って感謝し、新年に神様の希望を見て信仰を新たにする言葉に自分の思いを重ねることができるでしょう。岡山教会では一月の讃美に加える予定です。一緒に讃美しながら、迎えている新年に神様への希望を新たにしたいと思います。

「節期」ではありませんが、昨年９月の礼拝では「敬老の日」を意識して２８７番「主とともに」を讃美しました。私も周辺の友人達も親の老後や介護についての話題が集中する年齢だからかもしれませんが、この歌詞にあるように、神様とともに歩んでこられて年を重ねた聖徒方を大切に思い、神様の祝福を祈る、そんな信仰者でありたいなあと思わされます。歌詞は大宮教会の田中進先生です。

ちょうど原稿を書いている時期がアドベントでもありましたので、今週は87番「荒野の果てに」を讃美練習しました。この曲は〈くりかえし〉までの前半のメロディーがインマヌエル讃美歌とは少しだけ違いますが、練習では大きな混乱はありませんでした。むしろ〈くりかえし〉の「グロリヤインエクセルシスデオ」のパートの音に意表を突かれました。

インマヌエル賛美歌、日本基督教団の『讃美歌』と『教会福音讃美歌』の〈くりかえし〉を比較するとそれぞれ特徴があります。『インマヌエル賛美歌』はメロディーを引き立てるためにテナーパートが旋律のリズムとは関係なく動きます。対して日本基督教団の『讃美歌』はアルトパートがメロディーの３度下の音で旋律をなぞるように一緒に動いて行きますが、『教会福音讃美歌』はアルトパートが旋律のリズムと関係なく動くことで分散和音に聞こえるリズムを作っているようです。なので、もし讃美の声に女性が多ければ日本基督教団の『讃美歌』を、更にアルトに自信のある方がおられたら『教会福音讃美歌』を加え、男性の人数が優位なところは『インマヌエル賛美歌』でやってみるのはたらどうでしょう。もしそれぞれの〈くりかえし〉の違いをうまく使えば、その教会の声に合ったコワイヤができるかもしれませんね。それぞれの違いの良し悪しではなくて、「どう使ってゆくと自分たちの現状に対してぴったりしたものになるか」が肝なのでしょうか。

あくまで個人的なつぶやきではありますが、あと二回ほどお付き合いをお願いいたします。

13 神とともに歩む
14 ベウラの地（肉体にはあるが霊においては天にある）
15 たましいの安息
16 教会へのキリストの遺産（平安）
17 聖霊による喜び
18 奉仕のための力
19 尊いことに使われる器
20 献身（キリストへの献身）
21 きよめる信仰
22 求める人々への勧告
23 恵みを保つ道
24 心の裁決者
25 あかし

これらの内容について詳しくは書けませんが、一つひとつはとても大事な学びです。是非読んでください。一回で分からなかったら何度でも読み返し、また時々忘れたら読む必要があります。いつも信仰の歩みに光が当てられ、血潮を仰ぎつつ成長していきたいと思います。

以上、本の羅列となりましたが、私の読んだ本の紹介と致します。何かの参考にして頂ければと願っております。

歌ってみた

――教会福音讃美歌、ぜ～んぶ歌ってみました。

岡山教会牧師
渡邉そのえ

『教会福音讃美歌』が発刊されて4年以上が経ちましたが、皆さんはこの讃美歌とどのようなおつきあいをしておられますか。

岡山教会では２０１３年1月から毎週の祈祷会に3曲ずつ歌い始め、やっと全曲を歌い通しました。今は2回目に入っています。新しい讃美歌は、パッと見た感じは知らないメロディーだったり、今までと違う歌詞になっていたりして、とっつきにくいかもしれませんが、歌ってみるとその幅の広さが魅力的にも感じます。歌詞が文語調から口語調に変わったことで意味を汲み取りやすくなったり、原曲に忠実な曲想にしたことで作られた時代の音楽性を感じたり、編曲や調を変えたりしたことで斬新さを感じるものもあります。

最近聞いた話ですが、「ボクはこんな全然興味のわかない科目まで勉強しなくてはならないなんて、意味わかんないっス！」と半ギレ状態で抗議した若者がいたそうです。専攻する予定の専門科目だけ勉強できれば良いのに4年もかけるなんてムダだと、彼は感じたのでしょう。でも大学の先生はそんな彼に言いました。「確かに基礎教養科目には、キミの勉強したいと思っている分野とはまるで違うものもたくさんあるだろう。先生によっては退屈な授業もあるかもしれない。でもね、大学はこれからのキミの基礎を作るところなんだよ。広い基礎があれば、その上に乗せるものもたくさん選択肢が出てくる。今は限定するよりも拡大していった方が良くないかい？」

讃美歌についてもちょっと似たところがある気がします。私もミッションスクール在学中は日本キリ

スト教団の『讃美歌（第二編付）』を歌い、祖父の教会では『聖歌』が、大学時代に友人と行った他教団の教会ではまた違う讃美歌が使われていました。

以前は「私はインマヌエル教会の所属だから、『インマヌエル賛美歌』だけで充分だわ。」と思っていましたが、別の讃美歌を歌うことで讃美に対する視野が次第に拡がったように感じました。

また、使う讃美歌が自分のとは違っても同じ讃美歌の曲を歌うのは、主に在る兄弟姉妹と心が一つになったようで嬉しい気がしました。そういう意味では『教会福音讃美歌』が教団を越えた形で発刊されたということが、とても意義深いものに感じます。

これからは超教派の集会に出席しても「今日は、どの讃美歌を使いますか？」と尋ねることが少なくなることでしょう。メロディーにパートを入れてもアウェイ感が少なくなるかもしれません。

事実、『インマヌエル賛美歌』が発刊されてから約50年、私たちはこの讃美歌をずっと歌い続けてきました。しかしながら、この讃美歌が発刊されるまでは、集会のたびに謄写版で印刷された歌詞だけの讃美歌選を使い、それぞれが耳で覚えた節で歌うしかなかったという時代もあったのです。

私の頃にはすでに『インマヌエル賛美歌』がありましたから当然楽譜の通りに歌おうとするのですが、私が子供の頃はある年代から上の方々から「楽譜とはビミョウに違うふし」がよく聞こえたものでした。それでも50年歌えば「自家薬籠中のもの」となっていきます。

今私たちは、違和感なく50年前には新しかった『インマヌエル賛美歌』を歌い、（たとえ全曲を知らないにしても）この讃美歌に親しんでいます。そう考えると、まだまだ時間がかかるのは仕方のないことなのでしょう。あせって取り組むというよりも、ゆっくりでも少しずつでも、新しい讃美歌を歌って行けば

良いのではないか、もしもここから50年経ったならばこの讃美歌も「自家薬籠中のもの」になって行くのではないか、そんな長いスパンでとらえる寛容さも求められるではないのかなとも思います。

以前「豊後の赤猫」という話を聞いたことがあります。（「豊後の赤猫根性」とは少し違います）

あるお殿様が「この猫の色が赤である」と仰せになられたので、ご家来衆は「かしこまりました」と答え、その猫は赤い猫になったが、その後お殿様が代替わりすると「いやいやこの猫こそが赤猫である」と今までの赤猫とは似ても似つかない色の猫のことを指して仰せられたというのです。しかしご家来衆はそれに異議を唱えることなく、「はい、その通りでございます」と従い、お殿様のその言葉によって赤猫の色の方が変わってしまったという話です。少し正確さと温厚さに欠けるかとは思いますが、「自分の意見や信念とは相容れない事態でも、波風立てずにうまくやり過ごしてスルーして行くような状態」を言いたかった話だと思います。

では、最終的にこの讃美歌をどう扱うのか、どう受けとめるのかは誰が決めることなのでしょう？ 教会？ 主任牧師？ 奏楽者？ 礼拝出席者？ 少なくても、どこかのお殿様のお言葉のような「鶴の一言」で全てを変えるのではなく、共に考えて、共に受け入れる許容量が問われることかと思います……。

さて最後に、『教会福音讃美歌』を奏楽者目線で見て、何だかつかみどころのない（？）「不規則な拍子の曲」「拍子記号のない曲」のお話です。たいていの曲には拍子記号がついている中、何分の何と表記がないのには戸惑います。

そんなとき私は、表記のない曲を一分の一と考えて、一番わかりやすいのは心臓の音かな？と胸に手を当ててトントンとテンポを取り、弾いてみました。

例えば２６８番の頌栄だと１小節に入っている音符の拍数は規則性がないように見えますが、各小節の最後は２拍という共通点があります。きっちり２拍分のばして歌います。

さらに、これはあくまで私のアドリブなのですが、２拍のばした後にあえてブレス（息継ぎ）を入れてみました。音楽の規則性とは違う「空間」がある気がして、ふと「いにしえの聖徒はこの２拍に何を思い巡らしていたのかなあ」と思ったものです。その讃美が父・子・聖霊なる神さまをゆっくりと思い巡らしながら捧げられていたとすると、それはテンポ良く歌うことばかりにとらわれていた私への訓戒でもあります。……という風に一曲ずつ進むのですから、やはり時間はかかるわけです。

お目を通していただいてありがとうございます。あと一回、お話しさせてください。

わたしたちの宗教箇条⑨

第七条 キリストの十字架

神学委員会 神学部

第七条　キリストの十字架

イエス・キリストは、すべての人の罪のために苦しみを受け、十字架上で死なれた。これによってただ一度、完全な贖罪の業が成し遂げられた。この贖罪はアダムに続く全ての人の罪に対して有効であり、これ以外に罪の問題の解決はない。

今回は、キリストの十字架についてです。なぜキリストの十字架によって救われるのか、キリストの十字架にはどのような意味があるのかについて考えてみましょう。

▼私たちに代わっての十字架

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシャ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかしユダヤ人であってもギリシャ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」

（Ⅰコリント一・22～24）

しばらく前に、現代アメリカを舞台にした二人の堕天使を主人公としたコメディ映画を観たことがあります。その内容にローマ・カトリック教会は激怒し、かなり有名な俳優やコメディアンの出演した映画でしたが、カトリック教会の逆鱗に触れることに恐れをなした配給会社は手を引き、一般公開が遅れ、また劇場公開も限定されたという曰く付きのものです。そうしますと、何がカトリック教会を怒らせたのかと興味が湧き、ビデオ化されてから観てみました。

冒頭、アメリカのあるカトリック教会で、十字架で

ちを知恵深く育て、目を覆うような悲惨の中にある中国人たちにも、惜しみない同情を注ぎます。

肉体は地上にありながら、天的な生活を送る父親と、開拓者の娘として、伝道者生涯をたくましく生きる母親。その好対照が、卓越した娘の筆致によって見事に描かれています。

「誰も母を聖者的存在だとは言わないであろう。あまりにも行動的で、あまりにも溌剌としていて、あまりにユーモアに富み、気まぐれで、癇癖が強すぎた。（中略）最も人間味豊かで、速やかに動く憐れみの場、ほとばしるような明朗さ、恐ろしく短気な性質などが錯綜して、複雑きわまりない性情を織り出していた。私達にとって、最もよい親友であり、好伴侶であった。」

「私は……母こそは誠にアメリカの華だと思うようになった。最後まで若々しい精神を持ち続け、不屈不撓、寛大であり、人生の美にあこがれながらも、必要の場合には貧困のうちにも安住し、実生活の中に表現しうる観念的の理想主義では満足しない、真の理想を追う理想主義者――母こそはアメリカの息吹が凝って血となり、肉となった生命である」（抜粋）

『赤毛のアン』の訳者として知られる村岡花子も、「今日までに私が読んだあまたの書物の中で、最も強い感動をもって読み終えたものの一つであり、長い間の愛読書」と評しています。

娘の筆にならなければ、この稀有な夫妻の生涯は、世に知られないで終わったかもしれません。しかし、神は、中国の土となったこの宣教師夫妻の生き様を、ノーベル文学者の手で世に顕され、証された不思議を思います。アメリカの文壇でも、この2書は高く評価され、「大地」がノーベル賞を受賞した背景にも、2書の存在が大きいと言われています。

「わたしの一冊」、私が最後まで残しておきたい蔵書と言えるものは、絶版のものが多く、『戦える使徒』の方は入手困難かと思われますが、『母の肖像』は一般の文庫本なので、お近くの図書館やインターネット上の古書店でお手に取ることができるのではないかと思います。キリスト者の伝記は、どれも強い感動をもって迫ってきますので、皆さんも落ち込んだ時の滋養強壮剤としてぜひお試しください。

歌ってみた

――教会福音讃美歌、ぜ～んぶ歌ってみました。

岡山教会牧師
渡邉そのえ

まずは手前味噌的なお話から。

私たちの教区では2年前から《集まる教区、お隣へ》という集会をしています。「聖会以外の集会で一カ所に集まるのは大変?」と言う声に、交通網に配慮した二カ所の会場教会へ「近い方の教会に集まってみる」という、年齢制限なしの4月29日限定企画です（ちなみに今年は土曜日のため、お休みです）。

昨年は松江教会と呉教会が会場でしたので、私たちは松江教会へ参加しました。聖会ではお会いしたことのない兄弟姉妹方と共に主を讃美し、良きお交わりの時を持ち、いっぱいのおもてなしもいただいたその帰りに、国宝になったばかりの「松江城」へ行ってみました。

ひと通り天守閣を見学して外へ出ると、甲冑を着けた3人のお侍さんが目に入り……。その甲冑のカッコ良さに思わず引き寄せられた私たちに、一人が持っていた大きなホラ貝を吹いてくれました。それはまるで今にも合戦が始まりそうな緊迫感と迫力で、気がつくと周囲は人だかりで、みんなスマホを向けています。3人もそこはサービス精神にあふれて、あれこれポーズを取り、ひとしきり撮影会が終わったその時、ホラ貝のお侍様が言いました。「よいか、皆のもの。その写メを拡散させるのじゃー。エスエヌエスでどんどん拡げて欲しいのじゃ。くれぐれも頼んだぞ。」なーるほど、そうすればこのお城はどんどん有名になって、もっと人々に知られるようになるでしょう。そして「いつか行ってみたいお城」へと、人々の意識は変貌するでしょう。今の時代、「拡散」のデメリットも忘れてはいけませんが、この情報発信力はあなどれないものですね。

さて、『教会福音讃美歌』だって、情報発信は大事です。「はて? この曲はどんな歌?」と思った時、検

索すればわかるものもかなりあります。（※1）なかには、ボーカロイドの双子や可愛い女の子がアカペラで歌っているものもあります。（※2）主に「歌う人」を助ける発信ですから、新しい曲であっても検索して聞くことができれば覚えやすいですし、音符を読む時間が短縮できます。

でもこれからは、奏楽者を支援する情報にもお会いしたいです。教会讃美に奏楽者は必須です。そしてピアノを弾けると、奏楽もできると思われがちでだけど、それはちょっと違う……。たとえピアノの曲をたくさん弾いてきて、♯が沢山付いているピアノ練習曲に慣れていた人でも、♭が五つ付いている讃美歌の楽譜を見たら、気持ちがヘコまないでしょうか。ピアノ特有の指のタッチはオルガンには通用しない。曲を聴かせるように自分の感情を入れて弾いたら、歌いにくいと言われた。礼拝の雰囲気が変わってしまった気がする、等々。「弾けること」と「奏楽をすること」は、かなり違います。これに精神論的なものが入ると、もっとややこしいかも。

私が在学中の神学院では、奏楽者のための学びは「讃美歌が弾けるようになること」が主目的でした。だから練習して体得できれば、それでなんとかなりました。あとは独学です。でも独学は、時に主観的、独善的で後継者には伝えにくいものです。

でもこの讃美歌なら、幾つもの教団によってできたものだから、こういう課題にも対応できるかもしれません。たとえば奏楽に関して、教団を越えた情報のシェアができたら、よその教会音楽の学びをのぞくことができたら、自分だけでなくこれからの奏楽者にもプラスになるのではないでしょうか。ネットで配信してもらえたら、地域的な課題を乗り越えた嬉しい支援になります。

もちろん今までも、いろいろな情報は時に応じて紙媒体で載せられてきたとは思うのですが、できるならその情報をそのまま見たいですね。弾いている人を見たい。音の出し方を見たい。弾いている時の雰囲気を感じたい。お料理だって出来上がりの写真を見るだけよりも、作っている時の動画を見た方が、もっとたくさんの情報が受け取れます。

最後に、『教会福音讃美歌』だけで礼拝を守るとしたら、どんな感じでしょうか。岡山教会のある聖日礼拝です。

・最初の頌栄は二六八番「父・子・聖霊に」
頌栄はひと月通して同じ曲を順番に歌っていきます。
・次の讃美は二四〇番「ほめたたえよ力強き主を」
インマヌエル讃美歌五三五番「たたえまつれ」ですが、調が下げられ、旋律に少し変更があります。
・新しい教会学校の讃美歌からも新曲が入り、これも数週にわたって歌います。
・説教後の讃美は五〇四番「偉大なみ神の」
新曲ですが、「その月の歌」として毎週歌うようにしています。
・最後の頌栄は、インマヌエル讃美歌七番「父・御子・みたまの」。ここはまだ変えられません。

「祈祷会で全ての曲を歌ったので……」と言っても、教会の全員で全部を歌ったわけではないから、『教会福音讃美歌』だけの礼拝となると、まだ危うさのある取り組みかもしれません。プロジェクターで出した歌詞よりも讃美歌集の方に目が行きます。もう一人の奏楽者のおかげで、「私も声を出して歌う側の援護ができる……。」とは言っても、微力です。

でもこの讃美歌集のおかげで、新しい讃美に出会えて、讃美の幅も拡がって、個人的には楽しいです。一緒に取り組んで下さる教会の皆さんには、本当に感謝しています。

以上、「歌ってみた私の勝手なモノ言い」におつきあいをいただき、ありがとうございました。

※1福音讃美歌協会ホームページから情報ページ→曲の情報→番号で三〇〇曲以上がMidiで聴けます。
※2ユーチューブから検索できます。